

【優秀賞】

高齢化社会の伴走者として

金子 瑞花（東京都 白百合学園高等学校 1年生）

「夜中になると、怖くて眠れんけん。」

携帯電話の台頭で、滅多に鳴らなくなった家の電話が真夜中に鳴ると、張り詰めた空気が流れ、家族が息を飲んだ。曾祖母からの電話だ。怖くて眠れなくなるといふ。御年九十三歳。週四回通うデイケアでも、上品な曾祖母は人気者だ。所属するコミュニティがあるということは、張り合いになるらしい。一張羅を来て、迎えるのバスに乗り込んでいく。前日から、服を選ぶだけでも一大事だ。そんな曾祖母は、関東に嫁いだ娘達に迷惑を掛けまいと、かくしゃくと生きてきた。しかし、曾祖母の様子が変わったのは、あの日からだ。曾祖母の住む福岡県に豪雨が降り、ほんの数キロ離れた朝倉市では、甚大な被害があった。

「神様は、なんでこげんことするんやろか。」

亡き曾祖父の仕事で、東京の暮らしが長かった曾祖母は、普段は、私に合わせ、標準語を上手に操っている。しかし、感情が高ぶると、自然と九州弁が飛び出してくる。この頃は、九州弁ばかりだ。高齢者にとって、日常が覆されるような出来事は、命を取られるのではないかと、不安に駆られるのだろうか。私は、夏の予定を変更し、福岡に飛んだ。飛行機の窓から雲を見ながら、九州に豪雨

を降らせた、空を少し憎たらしく感じた。

元々曾祖母は、遠慮深い人だった。そんな曾祖母が、壊れたCDのように、同じ話を繰り返していた。私はびっくりしたが、やっと内に秘めていた不安を、外に吐き出せたのではないかとほっとした。高齢者は、なんせ我慢強い。世間の迷惑になるようなことは、極限まで我慢する。核家族化が進む中、生活を保守する方向に向かい、新しい家族の在り方を考えることが難しくなっている。曾祖母も、例に漏れず、地元福岡に在ることを選んだ。お世話にならない人生を選択したのだ。私は家族とは何かと改めて考えた。お互いを思うがゆえの遠慮が、家族にも存在している。親子だからと不躰に、子どもの人生に上がり込むことはしないのだ。家族とは、かくあるべきという形はもちろんない。時代の流れで、晩年の暮らしの質は向上した。だから、同居にこだわり、狭い家に老人を押し込めて暮らすのは、老人側からも文句が出そうなものだ。昔の長屋のように、ひしめき合って暮らすのは、今の時代は難しい。どうすることが幸せなのか。私は、曾祖母を前に、考えあぐねた。我が家にも社会が抱える歪みの一端が見える。社会制度に託すこと、家族で解決することの、二つの局面がありそう。この問題は、我が家に限ったことではないと思う。

家族で一番しがらみの少ない私が、思い切って曾祖母に聞いてみた。

「東京に来て、みんなと暮らした方が、何かあった時安心じゃない？」

「いやいや、墓も守らばならんち、だーれも、ともだちのおらんところに行ったら、さみしかろー。」

こちらの、良かれは伝わらない。二人の娘と、当てにならない息子が通ってくれるこの暮らしの方が、曾祖母には、うんと気楽そ

うだ。

あつちを立てればこつちが立たずの中、折衝点をどの家も模索しているのだと思った。行政・家族単位での取り組みの他に、高齢化社会の打開策はないだろうか。

父は、電球が変えられない近所の老人がいれば、頼まれてもない神棚掃除までやって帰ってくる。母も母で、近所の老人が倒れたと聞けば、枕元に置く写経をしている。地域を一つの家族と捉えれば、無理のない範囲で出来ることは、私にもありそうなのがする。

SNSでは、「これでもか」と、人との関わりを大切にする若者が、意識的に社会参加することで、地域の繋がりが、家族のような役割を果たすのではないかと、熱く考えてみた。

では、繋がりたい世代の私達が、高齢者と繋がるには、どうしたらいいのだろうか。犬の散歩をしていたら、犬が縁で、友達になった話を聞いたことがある。案外きっかけというのは、単純なことなのかもしれない。私の通学時間に、いつも家の前を掃いているおばあさんがいたことを不意に思い出した。

「おはようございます。」

と、一声掛けたら、見守り隊になれるのかもしれない。

社会の機能が変化すると、少子高齢化社会を支える側の私達も、一筋縄ではないかだろう。しかし、いつの時代にも、人と人が交わることで生まれる心の温かさは、決して変わらない。

曾祖母も、私の訪問以来、安眠出来るようになったという。SNSで瞬時に反応を求めるように、社会の変容の中で、私が出来ることを瞬時に探し、人と繋がって生きていきたい。